

我泣けばかげにほゝるむかの人によらじと思ひ
またよりしかな

にぎやかにうかるゝ我に寂しさをこのむ心のま
た多くあり

我に背をむけて走りし友なれど泣けるときけば
我もかなしき

關 みさを

安けき死を思はずひたぶるに生きむ生きむとあ
せる悲しさ

ものいはで臉どちて死に入りし人の様にも安ら
かにあり

父母は我安けしと思はして今日もなごみて過し
ますらむ

かゝる夜に母のいまさはなご思ひうとうとま
た幻に入る

安 永 みち

明日をまつことより外に何もなく夜のすとうふ
を獨守れる



偶

感

◎自己に對する解決

文科三年生 江 藤 馨

紛糾した周囲の事情に、餘りにも自己を没溺
し去つてかへりみなかつた往日を回想して、自
己の存在の果して那邊にあつたかを疑ひ、自己
なるものゝ根底の不確實を悟つて、口惜しさに
煩悶した事もある。熱し易い自分の性情は、或
る機會に觸れ時としては極端な感情の激動を來
して、其の結果精神上に一大打撃を受け、(否受
けたと自ら感じて)自己の猶少からず動搖しつゝ
あるのを悟り切なる後悔の念に打たれた事も
ある。自己の餘りに小に、餘りにつまらなく、
餘りに愚かである事に悶えた事も幾度であらう
「眞の人になり度い」と切に希つた結果は、或る

安らけく息あるものの眠るときひそかに雪のふ
りいでにけり
雪の夜に生れし故か死ぬ日にも雪の降れなご思
はるゝかな
紫の靄たちこむる夜の町にちらちら雪のふりい
でしかな
いつなりけむ雪のふき入る停車場にまよなかに
來る人を待ちしは
箱庭の谷にのこれるいささかの雪を喜びよる雀
かな
扉 扉 寂しき人が來て叩く扉よ永久にそのま
ゝにあれ
いつよりかあかぬ扉の前に來て立つといふ癖え
し心かな
灯して母と娘がすみなれぬ家の戸さしをするも
さびしき
我が家に開かれずして傳はれる戸あり我等の母
の母より

時は、この様に動搖して居る且弱い自分は、何
か偉大なる力に頼つてそれに導かれるのでなけ
れば到底正しい道を踏み眞の人となる事が出來
ないであらうと、頻りに自己の不安内心の空虚
からあるものを要求した。ある時は又、人生
のスタートは人格である、健全な人格さへあつ
たならば人世に何の恐る可き事があらう、何の
難い事があらうと叫んで、自分は以後一切冗口
をきくまい怒らず怨まず總ての感情殊には悪感
情を抑へて、平靜にかつ圓滿に人格の修養を務
めなければならぬと決心した。其の結果は、自
分の心の一隅にふと邪念の片影が映る事があつ
ても、最早それが直ちに自分に何等かの悪影響
を齎すかの様に非常に厭はしく恐ろしく思はれ
た。此の考は殆ど病的に一舉一動につきまどつ

て居た。然し暫くの中にこれは如何にも不自然な生活だといふ事を悟つた。喜怒哀樂の情を抑へやうと努めた結果は決して私には良好ではなかつた、一種因循な暗い影のひそんだ無邪氣さのなくなつたものに自分がつつて仕舞ひはしなうだらうかと云ふ懸念がふと起つたからである。私は矢張り感情は自然のもので到底抑へる事の出来ないものである、であるからこれを圓滿に高尚に導くより外はない又それが最上の方法ではあるまいかと思ひ至つて、今度は圓滿なる感情を切に渴仰した。たとへ悪感情を持つてもそれを顔に現はさない様な人がえらいのであると思つたからかやうにつとめやうとした。然し暫くの中これでは虚偽の生活をするのではないかといふ疑問が起つて、自己の良心が到底これに満足しなかつた。かうして心の不安空虚は依然として續いたのである。其の間にも、ただ學ぶに若かない何事も今の私は眞面目に爲す可き事を努力するに若かないのである、と思つた事も再三である。ある時は又、自分の絶対的價値

は現在にあるのではない、又自分は現在に於て何か爲し遂げやうとして居るものでもない、今迄の私は餘りに自分から自分の身まはり引き捉へられて左顧右眈自己といふものを全く意識せず周囲の紛雜に融和して居た、一寸先は暗い様な中でただくだらなく周囲に溺れて居た、併し最早私は捉はれまい、現實から一步ぬけ出て考へた其處に眞の自己はあり又眞の自己の存在の意義もあり生命價値もあるのではあるまいか、そして其處に始めて私の進む可き道も示されて居るのであるまいか、其處に到る可く私は今まで餘りに周囲のくだらない情實に捉はれ過ぎて居たのである、とかやうに考へて來たがこの爲に私は益々不安に陥つたのである。然るに此頃私はふとした事から始めて自分のおちつき場を見出した。少くともさし當つて自分を満足させる丈の解決を得たのである。勿論淺薄な非科學的極まる頭で考へた事であるから、その解決(?)は幼稚極まるものであるかもしれない、獨斷的なむしろ滑稽に失するものである

かもしれない、否きつとそうであらう、然し私にとつては眞に眞面目な問題であり又眞に眞剣に掛つて居るのである。で幸に皆様の御助言を得んとして、何か書けといふ御言葉に對しさし當つて何の考も浮ばなかつた結果、斯様な事を憶面もなく書く様になつた次第である。

私は近頃斯う云ふ様に自己を考へて居る。それは「私には現實に考へ又みる丈の價値以外に何かそれ以上の價値があり意義があるのではあるまいか、今日自分の行つて居る事、言つて居る事、欲して居る事には、ある偉大なるものの一貫した生命が動いて居るのではあるまいか」と、而して何うして斯んな事を思ふ様になつたかといふと、自分には誰にでもある事であるが久しい間一の大なる疑問があつた即私は頻りに「宇宙間の偉大なるあるもの」といふ事を思惟した、私は此の宇宙此の人世には何か偉大なる或るものがひそんで居るのであらうといふ事を頻りに思つたのである、何となれば、吾々人間が現在の様な共同的の團體を形成して、各々が兎に角

その發展といふ事に努力し、ある事を人の踏む可き道と定めて共同してそれに進みつゝある一寸考へれば皆つながつた、方向の同じ様な行動を採つて居る、それには何等か人間全体を斯く支配して居る偉大なるものがあるのではあるまいか、第一何の爲に、又何うして人世は始まつたのであらうか、人は何の爲に此の世に現れて來るのであらうか、何處から來つて何處に向つて行くものであらうか、限りのない昔から地球上には限りなく人が生れて來て夫々自分の力を盡して働いては死ぬ、斯う云ふ同じ事を繰り返して居るが果してそれは何の爲であらうか、人世はただ此の様な人が生きては死に生きては死にする事實の繰返しに過ぎないのであらうか、又地球の上は其事實を實演する舞臺に過ぎないのであらうか、それともその間には何か測るべからざる意味があるのであらうか、こんな事を果しなく考へてくればもう更にわからなくなつて仕舞ふ。そして其の極は何うしてもある偉大なるものが此宇宙此の人世の奥にひそん

で居るのであると考へないわけには行かない。もし假りにこの位が數へられない昔、地球の何處かで殆んど奇蹟的に(全く眞の奇蹟である)ある一つのものに生命が與へられた、其處には何の意味もなく、大なる宇宙のあるものと何の關係もなく偶然に、それが生命あるもの、始まりで、それから繁殖して數が増して來た、だんだん多くなると一つ所に居られなくなるから住はれる場所なら何處へでも擴がつて、そしてある時期に至つて地球上がほぼ是等のもので滿され其處に略々おちついた状態が出來て、そしてそのおちついた處で暮して行く中に、暮して行くのに都合がよい様に何でもだんだんに造つて來た。即ひとりひとり暮すのは淋しい、都合が悪くから共同して暮す様になつたとか、とにかく人が生命を保つに都合が好い様にして來つて遂に今日の様な風に人世の形式がなり立つた。どうか考へれば人世の目的は最人が生きて行くに都合が好い様になればそれで足りるわけである、これでは餘りにつまらないものではないか、

ない、又生命が果してその偉大なるあるものによつて現出されたものかといふ事はわからないが然しその偉大なる宇宙の或るものと生命との間には何等かの關係がなくてはならない、生命の中には必ず偉大なる宇宙のあるものが流れ込んで居るのではあるまいか、とにかく偉大なる宇宙のあるもの、生命と人の生命とが相通じて居て、黙々の中に相語り相合する事が出來るものではあるまいか、冥々のうちに相提携して居るものではないか、而して自己は其の尊い其の意味ある生命をうけて居るのである即自己にはその偉大なるあるもの、一貫した生命が動いて居るのである、其處に眞に自己の存在はあるのではないか、しかもその偉大なるあるものと黙々裡に相提携して居るが爲に人はそれを實現せんとし、それが又とりもなほさず偉大なるあるものの意志(?)であるのではあるまいか今日の私はかやうに考へて居たいのである。即自己の職分は此の偉大なるあるもの、實現にあつて、そこに眞の自己の實現もあるし、又人は

然しよく考へてみると地球に生命があらはれたその生命となつたものは一体何であるか、偶然と云つても其處には何うしても解し難いものがひそんで居るではないか、生命のないもの、上に生命のあるものを現出してそしてそれを生命のないもの、上にかくまで擴げた、即地球の一點に生命の躍動を與へてそして地球上をかくの如く生命の躍動で滿した、そのものもそこには何等か人力では解し難いあるものがひそまつて居る、否居るとしか思はれない、そうすれば矢張りこの宇宙此の人世の奥の奥根本根源には、何等かある偉大なる力か靈か何かあるものがひそんで居る様に思はざるを得ないのであるけれどもその或るものと云ふのは一体何か、そのあるものはその始めに、何うなるかわからないうがただ面白半分の一つの生命あるものを地球上に出してみたそれが偶然にも今日の様になつて仕舞つたのか、或は生命あるものを出してその窮極何處か行きつかせようとしたものか、私にはその偉大なるあるもの、何たるかはわから

皆これに向つて進んで居るものではないのであらうか、現今の様な形式(例へば家族社會國家といふ様な)を人世が探つて居るといふのも、人がその偉大なるあるもの、現實の爲にどの可くなつた一つの形式ではあるまいか、即今日迄の知識で偉大なる靈の實現のために最都合よき方法だとしてどつて居るのではあるまいか、又どの可くなつたのではあるまいか、その間に行はれた人生の進化もつまりは人生中の多數の自己がその實現の爲に競争を生じ、しかもその競争の間には自ら相互關係を生じ、又調和が共に存在して多數が存在しても其の間に秩序が行はれ、かくて進化して來たものではないであらうか、かやうに考へ來ると其の偉大なるあるもの、解釋はつかないとしても、自分丈にはとにかくどの可き眞の道がわかつて來た様な氣がする。即偉大なるあるもの、實現は即自己の實現であり眞の自己の實現は又とりもなほさず偉大なるもの、實現であるから私は眞に自己を實現すればよいとなる。それにはその爲

に最よい方法だとしてとられて居る現在の人世の形式又その中の行動、その爲に利益を計つたならばよいのである、即私としては自分の生活して居る日本の社會國家の爲につくしたならばよいのであらう。かうなるとつまりは人格實現説の結果に歸着する、而して又かやうになつた事を非常に私は嬉しく思ふのである。かつて倫理學に於て至善論が進んで結局の人格實現説に至つた時、何となく自分のおちつき場を見出して安心したのであるから、今もその意味で非常に嬉しく思ふのである。即かうした結果、私は先に云つた私には現實に見る丈の價値品位以外に即それ以上に價値があり意味があるもので私のなして居る事、欲して居る事等のすべてにはある偉大なるもの、一貫した生命が動いて居るのであると、かやうに考へるに至つたのである。尤人世中に於て今現に人々は偉大なる宇宙のあるものと合する可く最上の方法をとつて居るか何うかといふ事は疑問である、私は少くとも今の人世で人々の行つて居る活動のすべてが

必ずしもそれに向つての理想的のものではない様な氣がする。何となれば人世の歴史を尋ねてみると其内容に於て漸次進化して來て居る。その道徳とする所も根本に於ては不易ではあるがなほ進化して來て居るで今に於てもその道徳はなほ進化すべき餘地がある、進化すべきであると思ふ、今日の社會に腐敗の分子厭はしい分子があつたり、矛盾や混亂や色々あつて、よく行かない所があるといふのは何處か今日の道徳に欠陥があるからではないであらうか、と考へられるからである。即人世は進化して來て居るが今もなほその進化の歷程にあるもので、今は完全ではないが完全にならんとして居るもので即その偉大なる宇宙のあるものにもつと近よりつゝあるものではないであらうか、その途中であるのではあるまいか、そうすれば今の人世中の内容が悉くそれに向つての最上のものではないとしても、自分はその中に入つてその行動と歩をばあせ、その進化發展を期する即私は我が屬する日本帝國のためにベストを盡したならばそ

ここに眞の自己は實現され偉大なる宇宙のあるものを實現する自己の職分は果し得るのであらうと、かやうに考へたのである。

一 生れて二十年自分もやつぱり動搖の渦の中にあつた、否人よりも一倍くだらなく、幼稚に動搖した、しかも之に對して幼稚ではあつても、自分相當に何等かの解決をつけて置かなければ自分が不安で空虚で致し方がない故、人は知らない、又これから以後の事も知らない、たゞ現在自分丈に自分の頭で考へられる範圍内に於てこんな解釋を與へて、動搖して居る自分をこにかくこゝまで導いて來たのである。(完)

大正二年二月一日



教育は理想的にして現實的の人物、自分が好む言葉を用ゐるならば、ロカマンチユ、クラシマクの人物をつくることである。自分が理想的に教育された人物と云ふのは、義務と享樂を同一視するにいたらざる迄も、建設と破壊を同時になしつゝある程の者でなければならぬ。活動する人物は精巧偉大な藝術品より幾百倍も、己れのセンシユアス、エレメンツ、ラシヨナル、エレメンツ若しくは、リアルステイロク、エレメンツとアイデアリスティク、エレメンツをもつて居り、また幾百倍もよく其の融合をはかつて居るものである。いかなる事をなし、いかなる場合に處するも、義務を感ずると同時に絶えず自由の意識を失はない人は、かく教育された人物の最上の典型である。

田中王堂 (哲人主義)